

人権に関する特別公開授業の実施報告

「紛争地の人権：旧ユーゴ地域における平和構築の現場から」

人文科学教育研究室主任 山田 久美子

立教大学の全学共通カリキュラムには、学生が将来を考慮するためのパースペクティブを養い、コミュニケーションの基礎能力を身につけるという目的がある。また人権問題に対する意識を養うことを、学部を超えた全カリ教育の柱の一つと考え、総合教育科目「人権とキリスト教」および「人権とマイノリティ」を開講している。この他にも毎年多様なテーマのもとに人権問題に関する公開特別授業、講演等を提供し、併せて授業開発を図っている。1998



オサ
長 有紀枝 氏

年は1948年12月に国連で採択された世界人権宣言の50周年であった。人権を守るためには自分を知り相手を知ることが大切だが、そのために大学で何をどのように学べば良いのか。その際に全カリの総合教育科目と言語教育科目、さらには各学部の専門教育がどのように連携し得るのか。

このようなことを考えるきっかけになればと、人文科学教育研究室主催・英語教育研究室協賛で特別授業を実施することとなった。1998年は11月に国連難民高等弁務官事務所の「キャンプ・サダコ・プログラム」の参加者である大学院生と地方公務員の2名の方を講師に招き、「キャンプ・サダコ・プログラム：難民援助の現場から」というテーマの特別授業を行い、好評を得た。

本年度はNGO「難民を助ける会」の長 有紀枝氏と駐日カナダ大使館のジム・ニッケル氏に特別授業をお願いした。テーマは「紛争地の人権：旧ユーゴ地域における平和構築の現場から」と決まり、一週間前からは、5号館1階ロビーに写真パネルが展示された。

特別授業は10月27日（水）の17：30から7102教室で実施され、悪天候の上秋休みの前日にもかかわらず約150名の参加者を集めた。参加学生は新座を含めた全学部におよび、中にはご子息の持ち帰った「ニュース

立教」を見て参加したという立教卒業生の姿もあった。

今年は英語教育研究室の要請により、ニッケル氏には英語による授業をお願いすることになった。ニッケル氏の講義は、武力を伴う「平和維持活動」(Peace Keeping Activity)とは異なる、安全保障のための紛争予防や紛争後処理を中心とする「平和構築活動」(Peace Building Activity)の実態と可能性についてカナダ政府の立場からの話で、参加学生からはカナダ政府とNGOとの関係について質問があった。英語インテンシヴ履修者にとってもかなりのチャレンジであったと思われるが、英語による講義を聞くという体験に加えて、他の学生が英語で質問するのを聞くという経験は良い刺激となったようだ。

続いて長氏の講義では平和構築活動の具体例として、旧ユーゴ地域における難民支援について伺った。長氏は1994年から95年にかけて「難民を助ける会」の旧ユーゴ駐在代表をつとめ、現在も日本とコソヴォを行き来しながら支援活動を続けている。同会の対人地雷プロジェクト責任者でもあり『地雷問題ハンドブック』の著書がある。NGOが実は一番必要とされる紛争の最中には活動できないが、それでも日本人だからこそできることがある等、示唆に富む講義であった。この特別授業が学生の今後の履修計画に幅と深みを与えることを期待する。

授業アンケートの結果からはこのような問題に対する学生の関心の高まりが確認された。また参加者の中に教職員が多く



ジム・ニッケル 氏

みられたこともひとつの成果であったように思う。教職員が他の授業の様子を知ることにはこのような公開授業以外には難しい。様々な場面で公開授業を行い、通常授業に反映させることができれば良いのではないだろうか。

1999年度 英語自由選択科目「海外文化研修」報告

英語教育研究室 高山一郎

英語海外文化研修は全学共通カリキュラム言語教育科目のひとつである。期間は、7月30日から8月23日まで、場所はミネソタ州セント・ポールにあるベセル大学。この科目は、英語自由選択科目4単位あるいは1年生の場合は必修英語前期4単位に振り替え可能である。費用は、約45万円で、航空運賃、海外旅行傷害保険料金、ツアーガイド代、授業料、教材費が含まれる。今年度は約50名の参加があった。参加者は出発前に、土曜日5・6時限に行われる事前指導を受ける。教員の指導のもと、アメリカ社会の背景や異文化対応の技術を学び、日本について話したり、ディベートの練習をする。評価は、ベセルから送られてくる成績と、参加者が帰国後提出する英語による最終レポートによる。

このプログラムの特徴は、ホームステイ、ESL、レクチャー、フィールド・トリップが4個のテーマ(今回は人種、教育、ジェンダー、高齢化社会)を中心に有機的に関係していることである。参加者はアメリカ文化についての認識を深め、英語力を向上させる。

1) ホームステイについて

ホストは単に食事・住居を提供するだけでなく、学生のインタビューに答え意見を述べたり、宿題の手伝いをするようになっていく。一家庭にステイする学生

は一人、当然英語を使用せざるをえない。週末はすべての時間、平日は午後4時から翌日8時30分まで、学生はホストと過ごすことになる。

2) ESL授業

午前中一時間。ひとクラス8～9名程度。前もって設定した4個のトピックについてのディスカッションが中心。そのほか、フィールド・トリップについての感想が話し合われる。テキストには、テーマについて自分の意見を述べたり、ホストファミリーから得た情報やコメントを記入する個所があり、ホストとのコミュニケーションが促される。

3) 専門教員による講義

前述の4個のテーマに関して、ベセル大学の専任教員が講義を行う。受け身の授業でなく、質問が期待され、ディスカッションもとり入れられている。

4) フィールド・トリップなど

4個のテーマに関するものでは、ベセル・カレッジのChild Development Center 訪問、女性問題についてのパネル・ディスカッション、老人施設訪問などがある。Independent Study Session は参加者が自主的に計画するもので、グループ単位のディベートとプレゼンテーションを行う。また二泊三日のキャンプなど自然と親しむ企画もある。

海外文化研修に参加して

全学共通カリキュラムで海外文化研修がスタートして今年で2回目になります。私はアメリカ・ミネソタ州で3週間ホームステイをしました。海外に旅行以外で行くのは今回が初めてです。参加しようと決心した理由は、自分の英語力を実際に日常生活のなかで試してみたいと思ったからでした。

私のホストファミリーは、8歳の女の子と5歳の男の子と赤ちゃんのいる5人家族です。ホストファミリーが空港に私を迎えに来てくれていて、子供たちが私の名前を書いたプラカードを掲げて待っていたのを見たときはすごく感動し、これから一緒に暮らすんだといううれしさでいっぱいになりました。最初は辞書が手放せなかったのに、自分や家族、日本のことなど話しながらお互いを知っていくにつれて、会話も弾むよう

法学部政治学科 3年 古川 友紀

になりました。一番困ったことといえば、子供の話す英語が聞き取りにくく大変だったということです。でも、だんだん子供達が私に話しかけるときはゆっくり話すようになり、そんなちょっとした変化がうれしかった



たです。週末は、ホストファミリーと湖へ散歩にいたり、買い物に行ったり自由に過ごし、平日はベセルカレッジで勉強し、フィールド・トリップに出かけたりと充実した毎日でした。ベセルでの講義は、4つのテーマ（人種・ジェンダー・高齢化社会・教育）に分かれていて、たくさんの講師がそれぞれのテーマで話をしてくれ、アメリカという国を知る手掛りとなりました。私は、ジェンダーをトピックとして選び、働く女性、家族という観点から日本とアメリカを比較しました。実際に子供を産んでからも仕事をやめずに働い

ている女性に直接話を聞くことができ、日本とアメリカの違いを実感しました。

3週間という期間はあっという間で、私はホームシックになるどころか、もっと滞在したいと思っていました。このプログラムを通して学んだことは、家族の大切さ・暖かさです。私を家族の一員として迎え入れてくれたホストファミリーは、私にとってかけがえのない大切な人たちです。言語・文化は違ってもみんな同じです。話したい、理解したいという気持ちがあれば、言葉は関係ないということを知りました。

「海外文化研修」の意義

ただ漫然と自宅と大学を往復する毎日の中でこの「海外文化研修」に参加できたことは僕の大学生活の極めて重要なワンシーンであった。

初めての外国。初めてのアメリカ。見るもの全てが本当にBIGなものばかりで、驚きっぱなしだった。そんな僕にホストファザーの Aaron は日本の2倍くらいありそうな携帯を僕のもの比べて、しきりに「日本は何でもアメリカよりも小さいものを作るんだね。」と笑いながら感心していたのを覚えている。

Bethel 大学での授業はとても充実していて特に ESL は一番楽しい時間だった。みんな拙い英語力を駆使して前日のハイライトやホームワークを言い合った。日本の大学では恥ずかしくて手を挙げられなかった自分が1日何回発表したのだろうか？ 言っている内容はそんなに大したことではなかっただろうし、間違いだらけの英語だったと思う。でも何か「自分はここにいるんだ！」というある種の自己実現的な感覚があった。参加者の運営による ISS はかなり熱かった。3対3のディベートは自己主張の応酬で「まってまって！そっちはそう言うけどさー…」といった感じでだいぶ興奮していたような気がする。日本語なら論理的に正しい事でもそれを的確に英語で言えなければ意味がない。「本当に言葉が必要となるのは、ボディランゲージなどでは伝えきれない、複雑な思考を相手に解ってもらおうとする時なんだよ。」という高校時代の先生

文学部英米文学科 2年 川又 克己



の言葉が身にしみた。

日本に帰る最後の日、空港に向かう車の中で Aaron とこんな話をした。「かつみ、国際交流で大切な事って何だと思う？」「うーん。やっぱユーモアのセンスかなあ。」というのも Aaron とホストマザー Patti はとてもユニークでいつも笑顔が絶えなかったからだ。僕のこの旅をいいものにしてくれたのは彼らのおかげであった。「どんな時も笑っていられたら最高だね。」

最後に、アメリカで出会った人、見聞した事物はどれもすばらしく感動的であった。しかしアメリカという全く異質な空間に身を置くことで自分や周囲の人、物事を客観的に捉えなおし新たな視野が持てるようになったことこそがこの研修での最も大きな収穫であったと僕は感じている。

1999年度「中国語海外語学研修」報告

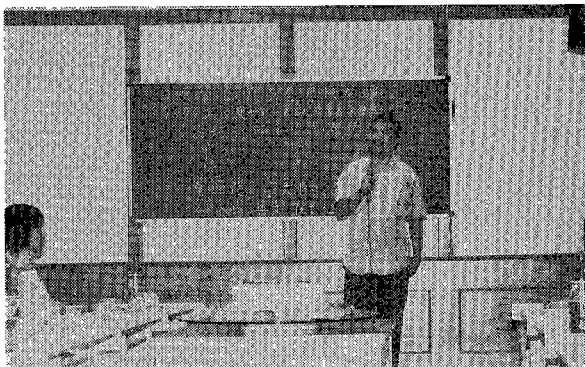
中国語教育研究室 マス タニ
 舛 谷 鋭

中国語教育研究室では、1992年から中国での語学研修を行ってきたが、2000年度より英語海外文化研修プログラムに次いで、全カリ自由選択科目として募集を行うことになった。修得できる単位は2単位で、所属学部の規定によって卒業単位にも認められる。

中国での語学研修は、開始当初から4年間は協定校の山西大学で、1996年からは専任教員の出身校である上海・復旦大学で実施している。ここ数年はCOCクラスを終えた二年生を中心に約50名の学生が参加し、中国人専任教員を含む二名以上で引率している。1999年夏期は、前半3週間で上海での語学研修で、最後の1週間は北京での体験学習だった。

上海は近現代中国の中心都市の一つで、19世紀半ば以降、租界時代の建築物が居並ぶ黄浦地区と、中国版マンハッタン・浦東地区がオーバーラップする大都会である。復旦大学は上海市街地の北の端に位置し、中国有数の重点大学にふさわしい広大なキャンパスに教室、宿舎から食堂、商店まであらゆる施設が揃っている。立教生が3週間を過ごす第八招待所は、メインキャンパスの東側居住区、すなわち中国人の生活区にあって、周辺の路地では食事から両替、文具にインターネットカフェまで、必要なものが何でも手に入る。別に留学生宿舎地域があるが、短い滞在で中国人の日常生活に触れることができるよう、毎年この招待所を利用している。バスやタクシーを利用すれば、近隣の繁華街である五角場から上海駅周辺まで、銀座通りに当たる南京路まで出なくとも東京並の品揃えで買物に困ることはない。生活に関しては不自由ということはなく、むしろ便利すぎて手持ちの現金が足りなくなる学生がいるほどだ。

中国語の授業は朝8時から11時半まで、二人の中国



成果報告会で模範歌唱(?)を示す中国人教員

人教員が各2コマずつ計4コマの授業を行っている。開講前に実施されるクラス分けテストで学生はA班からD班まで能力別に分かれ、各クラス10名前後となる。教材は復旦大学の外国人留学生受入機関である国際文化交流学院が編集・出版した外国人向けの教材を、レベルによって履修内容を調節して使用している。中級以上では日本の通年の分量の教材を一冊終えることになる。授業を担当する教員はいずれも国家対外漢語(中国語)教師資格を持った専門家が当たっているが、中国語のみのダイレクトメソッドで、特に初級クラスは教授用語が理解できず、慣れるまで苦勞する学生も多いようだ。この点については日本での事前学習で対処していきたい。

昼食後、午後は学内で書画、中国語歌唱などの文化講座があり、夜は伝統劇、雑技(サーカス)などの見学コースが用意されている。これら留学生一般の課外活動の他、立教生向けには『大地の子』の舞台となった宝山鉄鋼所見学や、週末を利用した蘇州などへの小旅行が行われ、限られた時間の中で様々な体験学習が実現されている。

最終週には中国人教職員を交え、茶話会を兼ねた成果報告会が行われ、学生による歌や寸劇などが司会進行も含めて中国語で披露される。クラス終了時の口頭試問では、どのクラスの学生も中国人教員の質問に半分以上反応できるようになるようだ。上海から北京への移動は、実践学習の皮切りとなるよう、中国人と一緒に二等寝台列車を利用しており、そのせいもあってか北京到着後に、街角で積極的に中国人と交流している学生の姿が見られるのは頼もしい。

学生はこの4週間を通じ、少なくとも1セメスター分に匹敵する中国語を見聞きし、口を開くことへの恐れも払拭されている。また現地体験によって、アンケートの通り予想以上のカルチャーショックを受けるようで、各人の中国イメージが像を結び、学習継続の動機に止まらない影響が及ぼされる。こうした成果は海外研修ならではのものであり、引率者として日々の事故や学生の病気などへの気苦勞を越えて、実施してよかったという感想を持つのである。今後は立教の全カリ中国語コース全体の中で語学研修が有効に機能するよう、位置付けを調整していくことが必要ではないかと考えている。



天安門広場での記念撮影。北京では自由行動が主だった。

参加者アンケートより

●最も印象に残ったこと

- 万里の長城は自分がそこに居るとは思えない、合成写真の中にいるようだった。中国人以外の人ばかりだったが、やはりその広大さに感動した。(文2・女)
- 何よりそこに暮らしている中国人の姿、暮らしぶりが印象に残った。屋台でものを売っている人、自転車に乗っている人、何もかもが日本と違って見えた。日本の常識が中国では通じないところが多々あり、日本人間で暗黙の了解というものがあるように、中国人にも中国人間のルールがあるのだと思った。1ヶ月暮らしてみて、それが何となく分かった気がする。(文2・女)
- 朝の屋台風景。旅行者として中国に行き、ホテルに宿泊していたら決して味わえないと思う。屋台でものを買って食べているときが一番、中国へ旅行に来ているのではなく、ここで生活しているんだという気分させられる。(社3・男)

●今後参加する後輩に伝えておきたいこと

- 集団生活も思ったより苦になりませんでした。それどころか、多くの仲間とともに異国の文化や生活に触れられて、とても良かったです。友達が本当に増えるし、絶対得られるものが多いので、ぜひ参加してみてください。食べ物の心配はいりません。おいしかったです。(文2・女)

●語学研修の感想

- 今回自分にとって転機となる研修だった。これから先中国と関係しながら生きていくことを決定づけるものだった。初めて全て中国語の授業を体験して、また日本では中国人と話す機会を多く持とうと努力してはいるが、彼らはみな日本語も話せるので、何

より中国で、日本とは関係のない一般人の率直な意見を聞けたこと、向こうが話す中国語を理解しようとしたことで飛躍的に力があがったことが自分にとって大きい。(社3・男)

- 何よりも中国に関心が持てたことはとてもうれしいです。自分が何をやりたいか全く分からず悩んでいたときに、この研修に出会いました。日本に帰ってからも、中国語強化を登録したり、中国に関する本を読み始めたのも、この研修があったからだと思います。他学部の人とも友達になれて、とてもうれしかったです。同じものに興味を持っているため、お互いに影響しあえて、よいライバルにもなったと思います。(法2・女)
- 今回の研修に参加することを決めるとき、ずいぶん悩んだのですが、思いきって参加して大正解でした。この一ヶ月間、一度も日本に帰りたと思わなかったのも、私自身かなり充実した生活を送れたのだと実感しています。今回の体験が私のこれからの人生に大きなよい影響を与えるのは間違いないと確信しています。この一ヶ月での中国語の力が飛躍的に伸びたとは言えないけれど、これをきっかけにもっと腕を磨きたいと思います。そしてまた近いうちに中国に来たいと思います。(文3・女)
- 最初のころは、中国と日本の生活習慣のギャップについていけなくて、すぐくつらいときもあった気がします。でも友達や先生に励まされながら、一ヶ月やってこられたと思います。一ヶ月間「中国語を学びたい」という一つの目的を持った人たちと一緒に過ごせたことはとてもステキなことだったと思いました。(経1・女)

スポーツ実習科目10年の移り変わり

スポーツ健康科学教育研究室主任 荒木 汐

〈新座体育施設完成〉

立教大学総合発展計画のもと、池袋校地過密化解消と1年次全日利用を新座校地で行うことを目的として、1990年4月、武蔵野新座キャンパスが開校した。体育関連施設については、屋内に大アリーナ3つと小アリーナ2つ、トレーニングルーム、さらにウエイトリフティング場、ボクシング場、レスリング場、相撲の土俵など体育会の施設を擁する近代的な体育館が完成した。屋外では多目的グラウンドと人工芝の多目的コート、テニスコートに加えて体育会施設の野球場、プール、弓道場を配している施設となった。池袋校地の狭い体育施設で、1、2年必修科目を設定していたときには、学生に対して「気持ちよく汗をかき、心身のリフレッシュをして次の授業に挑みなさい」と言っているが、更衣室にはシャワーもなく、施設も老朽化していた。その状況を顧みると自然豊かな武蔵野に立地する武蔵野新座キャンパスは立教大学の正課体育を展開する施設として充分なものであった。スポーツ実習が終了して、学生が授業に向かう際にもシャワーを浴びることができ、雨が降っても室内施設を利用して授業を行うことができるという快適な環境が整った。

〈必修から選択へ〉

大学審議会が1991年に答申を出した大学設置基準の大綱化によると、保健体育科目のみならず、全ての教科が必修の枠を取り外されている。それはスポーツに関わる教育を全く廃止せよと言う意味ではなく、各大学が独自の教育理念に基づいて、学生の心身の健康の保持・増進に努めるよう教育的な配慮をするといったものであった。立教大学では全学共通カリキュラムという独自の教養科目展開を試み、1997年から保健体育科目が必修から選択科目となった。しかし、学生の動向を見ると1・2時限について履修者は少なかったものの、予想を上回る多数の学生が新座のスポーツ施設に集まり、体力作りやスポーツを通しての人間形成の育成など、教養教育には欠かすことの出来ない体験を行ってきた。押し付けではなく、自分から進んで身体活動を行っている授業風景をみるにつけ大学生の学生らしい真の姿を感じたものである。このような学部一日利用によるカリキュラム展開も文、経済、理、社会、法学部の武蔵野新座利用撤退により、

新座スポーツ施設の有効活用が事実上不可能な状態になり、1990年以前の脆弱なスポーツ施設でのカリキュラム展開を余儀なくされた。当時、大学当局との話し合いにおいて、武蔵野新座スポーツ施設を有効に活用すること、つまり、全学の学生に向けた科目を何らかの形で残すという方針が守られなかったことは非常に遺憾であった。コミュニティ福祉学部と観光学部が武蔵野新座キャンパスに新設されたとはいえ、この広大なスポーツ施設を2学部と一部の体育会学生だけに使用されるのはなんとも残念なことである。

〈2000年度からの全カリスポーツ科目〉

池袋校地でのスポーツ関連科目の実施については12号館、旧中学校中庭に現在建設中である南側グラウンドが中心となる。また1998年9月に17号館として、狭いながらもトレーニングルーム(新座の1/20位)と更衣室、フロアルームが作られた。しかしながら、この施設だけでは学生が希望している種目についての十分な配慮が出来ない。現在池袋校地では新学院グラウンド(北側グラウンド)と中学校体育館、4号館テニスコート、中学校テニスコート、プールなどが設置されているが、2000年開校の池袋中高の体育カリキュラムと十分な調整を行い、立教学院として取り交わした施設の共用を一貫連携教育の観点から実行していきたい。

全カリスポーツ関連科目は2000年4月から池袋校地で97コマ開講される。そのなかで新たに「スポーツスタディ」という2単位科目を試験的に19コマ実施することになった。また、今まで実施していなかった「太極拳」「フットサル」「インラインスケート」「マリンスポーツ」(学外集中)等の新種目を展開する予定である。

身体活動は今後日本でも深刻な問題になるであろう肥満や生活習慣病を予防してくれる。このことは知識としてわかっているが実践されなければ効果がない。「スポーツスタディ」はこのような教養としての身体活動を十分理解し、生涯にわたって楽しみながら生活の中に取り入れていこうというものである。

スポーツ健康科学教育研究室ではスポーツ実習が心身のリフレッシュや健康づくりに役立ち、学生生活が充実したものとなることを願っている。